

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】五十嵐 元道

【所属】(助成決定時)北海道大学 法学研究科

【研究題目】平和構築の歴史・思想的探究

【研究の目的】

冷戦後、世界各地の紛争後地域で実施されてきた平和構築活動は大規模化し、紛争後地域の人々の意志決定を超える権力性を外部アクターが握る傾向にあった。民主的に選出されたわけではない外部アクターが主権的権力を握る平和構築は、1960年以前に行われてきた植民地統治とどれほど異なるのか。なぜ、脱植民地化にもかかわらず、そうした活動が国際社会において正統化されてきたのか。また、平和構築活動にはどのような権力性が内在しているのか。本研究は、平和構築活動における権力性と植民地主義的側面を分析すること、また、それを再生産してきた言説構造を解明することを目的とした。そこで19世紀の植民地統治から冷戦後の平和構築活動まで、常に使用されてきた「トラスティシップ」という概念に着目し、分析を行った。

【研究の内容・方法】

本研究では、トラスティシップを分析する際、フーコーの系譜学を応用した。国際関係論においては、これまでも系譜学を用いた研究は多くあったものの、系譜学をどのように適用するかについては、十分に説明がなされてこなかった。系譜学は、元々、社会のなかで普遍化、あるいは不可視化したように思われる権力構造を、その起源に立ち返って可視化し脱構築することを目的とした方法論である。本研究は、フーコーが系譜学を採用するに至った経緯にまでさかのぼり、その方法論の主要な特徴を明確にするとともに、国際関係論におけるこれまでの系譜学の使用をフーコーの系譜学との関係に照らし合わせて分類した。そして、系譜学の国際関係論の方法論としての使用法を明らかにした。

そのうえで、トラスティシップが構成されてきた歴史を19世紀の植民地統治から再検討し、第一次大戦前後、第二次大戦前後、さらに冷戦期の前後でトラスティシップが再構成されてきた過程を分析した。こうしたトラスティシップの歴史・思想的分析を通じ、トラスティシップの構成において人道主義的言説がきわめて重要な役割を果たしてきたことを明らかにした。人道主義言説は、19世紀以降、時代ごとに変転してきたが、常に「他者の痛み」を問題にしてきた。人道主義は、「他者の痛み」の原因を何らかの人間・社会モデルに照らして分析し、分析対象となった社会を「病理化(pathologization)」した。そして、その「病理化」に従って、「処方箋(prescriptions)」を提示した。トラスティシップは、「病理化」によって構成された「正常な社会」と「病理を抱えた社会」の間において成立し、その関係に基づく政治・社会・経済政策によって具体化されたのである。

【結論・考察】

以上のようなトラスティシップの歴史・思想的分析から、次の2点が明らかになった。第一に、トラスティシップは19世紀の植民地統治から冷戦後の平和構築まで、一貫して人道主義的言説によって構成されてきた。このように言うことは、トラスティシップの現実主義的側面を捨象することを意味しない。そうではなく、トラスティシップという「介入する側」と「される側」の関係性を規定する言説体系は、現実主義的側面を覆い隠すように、人道主義的言説によって構成されたのである。ただし、人道主義の担い手となった人々は、必ずしもそうした現実主義的意図をもってトラスティシップを構成したのではなかった。つまり、人道主義の無意識的な権力性がトラスティシップの分析から明らかになった。第二に、トラスティシップは、「他者の痛み」を問題にしなが、他者の政治的エージェンシーのはく奪を理論的に正当化してきた。この点が、平和構築が植民地統治から引き継いだ権力性のひとつなのである。